

# ガンコ親父の

昔々、世界で数年に一度開催される「冬の競技大会」を誘致してきた王様がいた。しかし肝心の雪は降らず、氷も薄く張っただけで大会の準備ができずに胃は痛んだ。

それを見ていた氷の悪魔は「このチャンスを活かさない手はないな」と悪巧み。人間に姿を変え、氷の山から降りて、王様のところに向かい、「こんなにも雪が降らなくて大変ですね」と、心の中で赤い舌を出しながら哀れんでみせた。

「しかし大丈夫です、お任せを。私には魔力があります」と、実際に机の上のコップの水を一瞬のうちに凍らせてしまった。氷の悪魔は王様と取引をした。雪を降らせ、氷を張らせることができたなら、あなたの美しい姫と一度デートがしたい。その許可が欲しいと王様に迫った。窮地に陥っていた王様はカフェデートで、一度だけならばと、涙を飲んでOKを出したのだった。

悪魔の言うとおり競技場に雪は降り、氷は張った。王様の約束通りに姫はカフェに向いたが、すぐに行方不明になった。

本性を現した氷の悪魔から「姫を返してほしかったらお前の王位と交換するしかないな。俺がお前の国の王様になるのだ。断ったら、姫の命はないものと思え」と脅迫状が届いたのだった。

奄美黒糖焼酎

王様は姫奪還のため「取り戻した者には、姫への結婚挑戦権を与えよう」と信頼できる若者三人を選抜した。姫に憧れていた三人は氷の悪魔が棲む山に向かった。三人は凍りついた急斜面を登り、悪魔の棲家にたどり着いたが、入口は重い石の扉で閉じられていた。俺の力が必要な時が来たと、国一番の力持ちは全力で石の扉をこじ開けたものの、腰がグキツと音を立てて、その場に崩れ落ちた。中には氷の悪魔が待ち構えていた。今度は俺の番だとばかりに、アーチエリーの名手である二番目の男は矢を放つが、氷の身体に簡単にハネ返されてしまった。

しまっ  
ちゅ  
伝蔵

でん

ぞう

氷の悪魔が三番目のマツジローを睨んだその時、マツジローが持つて常圧蒸留

いたキャンドルの聖火が目に入り、瞬間的に視力を失った。その隙に囚われていた姫を助け出して屋外に飛び出したが、最後は氷の悪魔から崖に追い詰められた。「おい、そのヒーローさんよ。凍りついた崖をどうやって降りるんだ？」と急角度の崖を見てニヤリ。

マツジローは背中ボードを下ろし、姫を背負った。そして氷の崖に続く急坂をボードで滑り降り始めた。「滑るのは得意なんだ。もう何回も王国の公務員試験に『すべて』いるからな」と氷の悪魔に言い放った。頭に來た氷の悪魔は強風を浴びせた。

昔ながらの手造り  
こだわりの焼酎

喜界島の豊かな大地の恵と豊かな自然の中で、永年の伝統に受け継がれた製法でじっくりと醸しあげた「しまっちゅ伝蔵」黒糖焼酎の味を全面に出し昔ながらのコクのある味と香りです。

強烈な風に巻き上げられたマツジローは枯葉のようにひらひらと舞ってしまった。

背中を姫は覚悟して「ああ、お父様」と目を閉じた時、マツジローの身体がくるくると回転した。なんと空中で五回転半。何百年後に日本の選手が成功することになるビッグエアだったのだ。大技を成し遂げたマツジローは無事帰還を果たし、願いが叶って姫と婚約することになった。その日はちょうど聖バレンタインデー。姫はしまっちゅ伝蔵をマツジローにプレゼントしたという。

「冬の競技大会」も無事に終わり、暖かい春が訪れようとしていた。王国の民衆は二人の結婚式のためにと大きな金メダルを準備。めでたし、めでたし。



900ml (25度) 1800ml (25度) 1800ml (25度)



25度  
好評発売中



喜界島酒造株式会社  
鹿児島県大島郡喜界町赤連2966番地12  
☎0997(65)0251



喜界町  
鹿児島県

## 「ビッグエア」に乾杯!!

<http://www.kurochu.jp> お酒は20歳になってから。お酒は楽しく適量を。飲酒運転は法律で禁止されています。妊娠中や授乳期の飲酒はお控えください。